ISSN 0915-3284

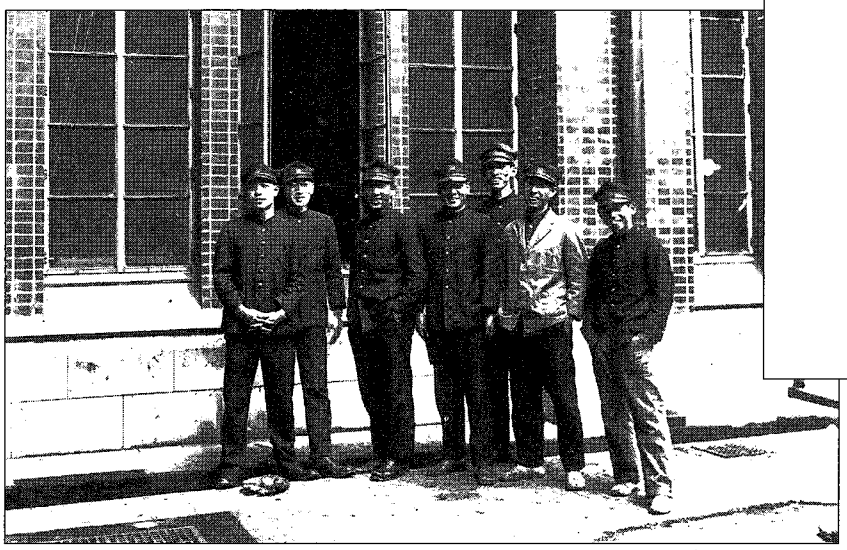
東京大学史史料室ニュース

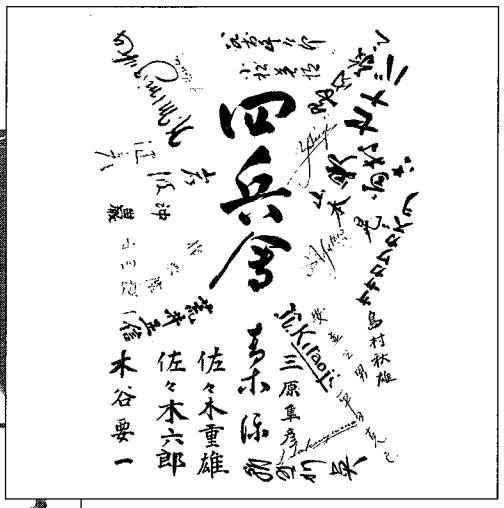
第37号　2006・11・30

目　　次

駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室とその活動 ……2
東京大学史像の検証を続けて～学内の銅像等金属回収について～ ……4
史料室日誌抄録 ……8

校舎前で仲間と記念撮影





「四兵会」色紙への寄せ書き

屋上にて「造兵」の人文字

駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室とその活動

皆 川 義 孝

はじめに

駒澤大学禅文化歴史博物館（以下、「禅文化歴史博物館」と略す）は、2002年の開校120周年記念事業の一環として開館し、館内には大学史資料室および大学史展示室が設置された。駒澤大学では、大学史資料室の開室までは常設の大学アーカイヴ施設がなかった。

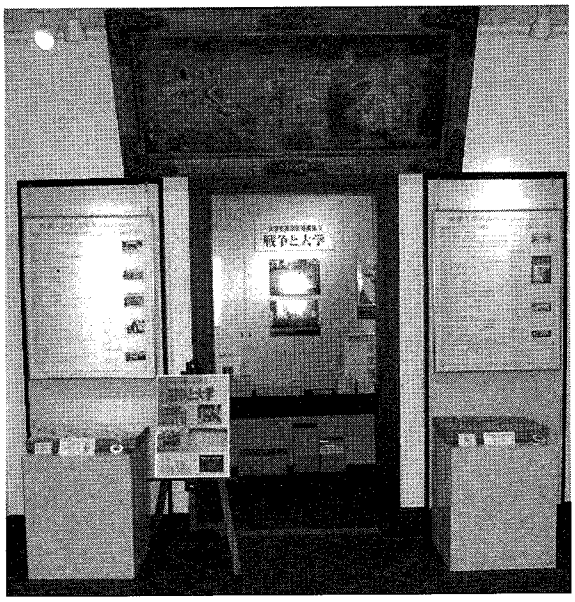
禅文化歴史博物館の施設は、1928年に旧図書館として建設され、1999年に東京都から歴史的建造物として認定され、文化財としての価値も高い建物である。

禅文化歴史博物館の開館の目的は、①東京都歴史的建造物の保存・活用、②駒澤大学の特色を活かした禅（仏教・宗教）を中心とする博物館とする、③博物館学講座・実習に資する、④大学の歴史に関する資料収集、保存、公開などである。

大学史資料室の業務と収集資料

次に、大学史資料室の概要とおもな活動について紹介する。

大学史資料室が開室されるまでは、駒澤大学の大学史資料を常時、収集、保管、公開する施設はなかった。2003年４月以降、大学史資料室専属の職員（嘱託）１人が配属となり、その活動が開始された。配属された職員は、2000年から開始された開校120年史編纂に従事した。



大学史展示室

大学史資料室は、禅文化歴史博物館の１階に大学史資料室、２階に大学史展示室がある。資料は、大学史資料室、博物館地下１階収蔵庫及び開校120年史編纂室（現大学史作業室）などに収蔵している。

大学史資料室の業務は、専属の職員が１人であることに鑑み、①大学史資料の収集・整理、②大学史資料の公開の２本柱とした。

大学史資料の収集・整理としては、開校120年史編纂資料の整理及び卒業生への資料提供の呼びかけるなどして、資料の収集を中心に行ってきた。大学史資料の公開としては、大学史展示室での展示や『駒大史ブックレット』（年１冊）の発刊を行っている。

この他、図書館、総務部広報課、学生部、教育振興部への写真・情報提供、2004 年度からホームカミングデーでの展示、2006 年度から大学新入職員研修での自校史の講義など、他部署からの依頼業務も年々増加の傾向にあり、徐々に学内での認知度が高くなってきている。

2006年３月には、地域社会や近隣住民に資料や写真の提供を呼びかけて、1955年代の駒澤大学と玉電のジオラマが完成し、一般公開することになった。このように、地域社会との連携・協力も重要な業務となりつつある。

大学史資料室で収蔵する資料の総点数は、約5,000点（2006年７月31日現在）である。文書資料は前身校の曹洞宗大学林専門学本校から曹洞宗大学までの明治から昭和初期の大学作成の非現用学内資料、教職員および学生、卒業生、大学関係者に関する資料、学外資史料保存機関（独立行政法人国立公文書館など）の所蔵資料、元教職員、卒業生および曹洞宗寺院からの寄贈資料、モノ資料は曹洞宗大学林専門学本校山門の部品、校歌レコード、学生服など、開校120年史編纂室で収集した写真資料などがあげられる。

なお、大学史資料室への寄贈資料、展示、『駒大史ブックレット』などの刊行物発行の情報は、禅文化歴史博物館ホームページ、学内広報誌などで公開している。

大学史資料の展示とその効果

大学史資料室では、資料の公開の面ではこれまで展示に重点をおいてきた。以下、展示の概要やその効果についてまとめておく。

大学史展示室の展示は、2003年９月以降、大学史資料室が担当することとなり、2006年度からは１年に４つのテーマを設け、展示を行うこととした。各展示会は「大学史特集展」と冠し、2006年10月までに６回開催してきた。また、会期も当初、７か月間と長期であったが、現在は３か月としている。

大学史展示室は、博物館の２階に１室設定されている。また、禅文化歴史博物館全体の展示としては、常設展示のひとつとして位置づけられており、当初は展示替えやテーマを設定しない方針であったが、卒業生からの寄贈資料の増加にともない、寄贈資料の公開を目的に、現在のような年４回のテーマを設定する形が定着しつつある。

展示のテーマや内容は、展示室のスペース的な面を考慮して、大学の草創から現在までの時系列の展示を行うのではなく、近隣社会、近代社会や文化人とのかかわりなど、駒澤大学の歴史でトピック的な内容をテーマとして取り上げることとした。また、当館の来館者は学内の教職員・学生、卒業生のみならず、一般の高齢者から小学生まで、さまざまな階層、年齢層にわたっている。このため、キャプションは中学生が理解できる程度の平易な文章とし、大学の歴史との関連性に重点を置くことに配慮している。

大学史展示室の展示風景

見学者数は、2006年４月２日から６月30日に開催した特集展４では2,359人を数えるなど、徐々に増加の傾向にある（内訳では、学生の見学者が増加）。

博物館の展示であるキャンパスとぴっくす（平成16年度から担当、会期は３月から４月、内容は学生サークルの展示）、年２回開催される企画展でも大学史にかかわるコーナーについては展示を担当している。

このほか、ビジュアル的に大学の歴史を学ぶことができる「デジタル駒大史」（パワーポイントで作成したスライドショウ）のブースを博物館２階ロビーに設置している。これまでに、１．駒沢移転90周年、２．正門のうつりかわり、３．キャンパスのうつりかわり、４．地歴のあゆみとその世界、５．司馬遼太郎と駒大同窓生、６．岡本かの子と仏教思想のスライドショウを作成した。「デジタル駒大史」は、映像により簡単に大学の歴史を知ることができることから、設置当初から多くの閲覧者があり、自校史教育の面で大きな効果があったと思われる。

ここで、2004年９月から2006年８月までの大学史特集展についてあげておく。

①特集展１「駒沢移転90周年記念展　―駒沢とあゆんで90年―」（会期：2003年９月24日～2004年４月23日）。

②特集展２「駒大ゆかりの作家たち１　―司馬遼太郎と駒大同窓生の出会い―」（会期：2004年９月21日～12月17日）。特集展２「駒大ゆかりの作家たち２　―岡本かの子と仏教思想―」（会期：2005年１月17日～４月27日）。

③特集展３「通学手段のうつりかわり　―路面電車から地下鉄へ―」（会期：2005年10月17日～2006年３月31日）。

④特集展４「思い出の学生生活」（会期：2006年４月２日～６月30日）。

⑤特集展５「戦争と大学」（会期：2006年７月３日～９月29日）。

ここにあげた展示以外でも、博物館の企画展・キャンパスとぴっくす展、他部署が主催するホームカミングデーでの展示なども担当するようになり、館内・学内での展示活動が年々増していることが指摘できる。

展示への反響であるが、展示を見学した卒業生からの問い合わせ、資料の提供も増加の傾向にあり、卒業

生を中心に反響が大きかったことがうかがえる。

今後数年は寄贈資料をテーマとする展示活動を行っていきたいと考えている。ただし、大学の開校記念日（10月15日）の前後の特集展については、大学の創立から現在までの歴史を何年かに分けて展示を行うなど、自校史教育に重点をおいた内容としていきたいと思う。

このように、大学史資料室は、開室以来、博物館内の施設である利点を生かし、展示に重点をおきながら活動してきた。この結果、学内外での認知度が高くなってきたことがいえる。しかし、展示活動のみが、大学アーカイヴの使命とはいえない。

さまざまな課題点があげられるが、とくに今後改善していかなければいけない点としては、学内資料（非現用文書）の収集・整理、また保管庫の確保があげられる。また、急務な課題としては、他部署からの要望が多い写真資料のデータベース化およびその公開がある。

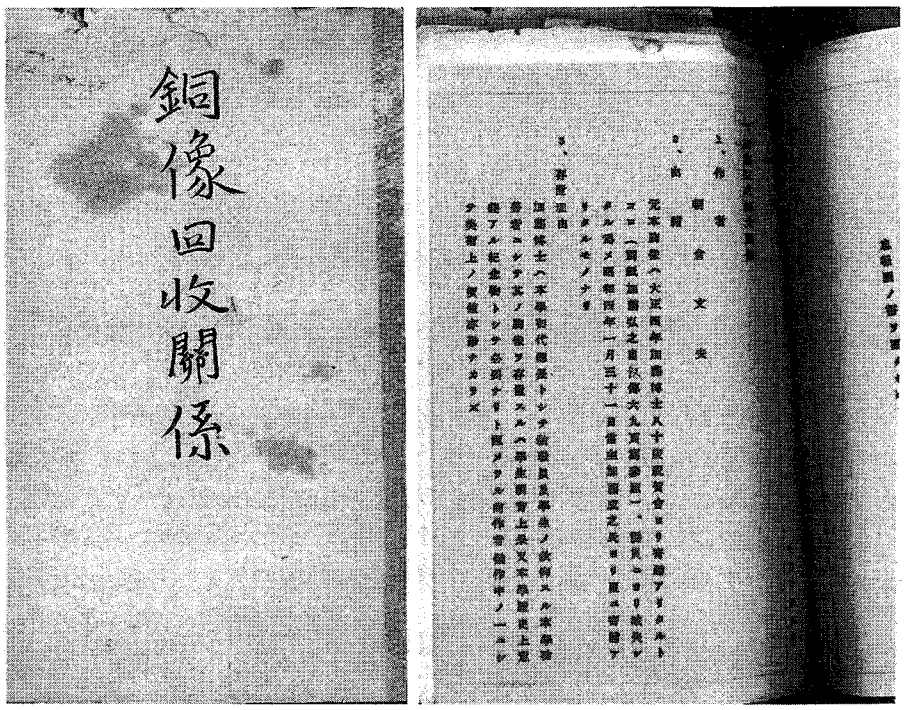
（みながわよしたか：駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室）

東京大学史像の検証を続けて
～学内の銅像等金属回収について～

谷　本　宗　生

本学でベストセラーとなっている、木下直之・岸田省吾・大場秀章『東京大学本郷キャンパス案内』2005年を読んでみると、日常接している本郷キャンパスの姿がまたひと味違ったようにみえてくる思いがする。以前、寺崎昌男『プロムナード東京大学史』1992年や中野実『東京大学物語　まだ君が若かったころ』1999年などの書を読んだ際にも、それぞれ同様な気持ちがしたことを思い出す。筆者（谷本）には、本学に関するエピソードや従来あまり知られていない史実などを踏まえて、著者各々の感性で新たな「東京大学」の歴史像を提起しているように感じられた。岸田省吾は、「その時代の営為を形に留め、まとまりある時間の形象として刻まれる。それが維持され、受け継がれ、さらに新たな時間の刻印が加えられてゆく。キャンパスではそのような痕跡が幾重にも重層していることを実感できる。」（同上、6頁）とし、「本郷キャンパスでは、こうした過去の痕跡が現在のキャンパスをつくるものとして生き生きと現れてくる。」（7頁）という。時の経過にともなう大学キャンパスの変貌のなかで、このような思考・姿勢はより重要性を増すのではないだろうか。

とくに、「博士の肖像」を取り上げている木下直之は、「教え子たちが恩師の在りし日の姿を銅像に残そうとした情熱がいっそう際立つ。」（同上、36頁）とするいっぽうで、「銅像にとっての大敵は、こうした時間の経過にほかならない。銅像の主（像主と呼ばれる）が誰であるのかが、時とともに忘れられるからだ。」（37～38頁）と指摘。東京大学史像の検証をめぐって格闘を続ける筆者からしてみると、木下はこのほかに、東京大学史上の興味深い事柄をいくつか簡略に指摘している。「正門の扉は大戦中、取り外し隠されていたので、金属回収を免れた。」



『銅像回収関係』（大学史史料室蔵）

（66頁）、「戦時中に行われた金属供出は、家庭内の金属製品にまで及んだぐらいだから、全国の銅像を容赦しなかった。数多くの銅像が姿を消し、台座だけがぽつんと残された光景を今でも目にすることがある。幸い、東京大学の銅像群はこうした事態に至らなかった。」（146頁）、「ダイバース像は御殿下運動場脇の道路沿いに移され、さらにイギリスを敵に回した戦争中は、銅像を台座から外して化学教室図書室の書庫に隠し、一九六四年になってようやくもとの台座に戻されたという。」（164頁）などの記述である。

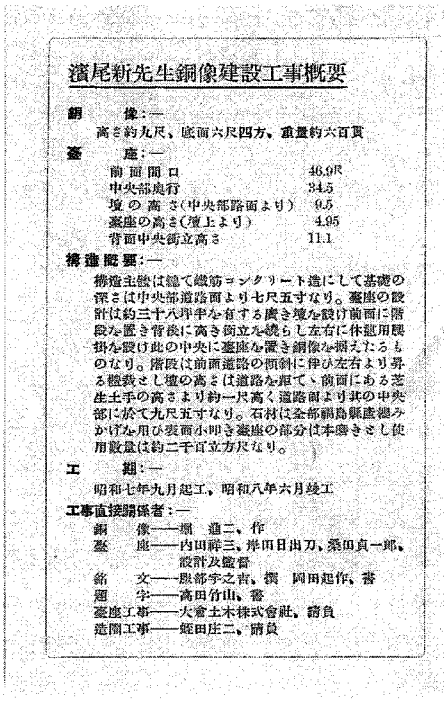
筆者が勤務する大学史史料室（安田講堂５階）には、戦時下の銅像等金属回収に関する事実関係を記録した『銅像回収関係』（縦28×横21cm）という公文書綴り１冊が保管されている。これらの記録は、本来であれば各年の『文部省往復』綴りなどに収められる事項と推測するが、学内の銅像等金属回収に関する件を一括した綴りになっている。『銅像回収関係』には、他の公文書綴りと異なり、巻頭に目次はない。管見の限りでは、この件について『東京大学百年史　部局史四』1987年に、「本学はできるだけ銅像は残す方針で関係機関と折衝を重ねてきたが、昭和十九年一月十日付をもって文部省総務局長から、すべて回収の対象とされた旨通知された。この結果、銅像、正門、囲繞などはすべて回収の対象とされ、正門及び囲繞は、すべて木製となった。正門の扉、銅像、囲繞の一部で現存するものは、当時、営繕課職員等の手により収蔵したもの」（1063頁）と記されているだけである。

当時の「大学新聞」を細かくみていくと、関連の情報が断片的にうかがえる。「“窄き門”“登竜門”と謳はれた本学正門の鉄扉も去る一日から実施された銅鉄回収の赤紙に呼応して愈取り払はれることとなつた…なほ「菊花の御紋章か旭日か」で問題になつた旭日の附いた冠木門の部分は取り残される」（「輝く卅年史に幕　銅鐵回収令に呼応する正門鐵扉」『帝國大学新聞』第869号、７面、1941年９月15日）、「眼に懐しき学園の景観も暫しはさらは、近頃本学では図書館前の噴水塔を筆頭に、アーケードその他の壁間を飾る電気器具や美術品、階段廊下の鉄柵手すり等凡ての金属製品が相ついで取はずされて行く　これは政府の唱導する金属回収運動に呼応して本学営繕課で学内の不急施設や代換品入手可能の設備を収納しつつある」（「噴水塔から一千貫　金属製品を自発的に取りはずし　本学今は供出令待つのみ」『帝國大学新聞』第940号、３面、1943年４月12日）、「あの学内随一の大銅像、土木総長と謳はれた浜尾新元総長の銅像も去る四日征きました…一昨年

以来次々に出陣していつた学内の諸銅像につづいてまさに横綱の場所入りともいふべきもの、流石は学内随一の大銅像の名に背かず〇〇〇貫の青銅を取りはづすには五日間を要したほど…この浜尾総長像の出陣に先だつて学内の吾建築界の恩人、故工学部講師コンドル博士立像（工学部一号館前）吾国機械学のパイオニア、故工学部講師ウエスト博士胸像（工学部列品室裏）「ベルツ丸」で御馴染の故医学部教授ベルツ博士胸像（構内運動場南側）化学の親、故理学部講師ダイヴァース博士胸像（理学部化学科教室前）日露戦争の際既に学生出身で全軍布告の勇士市河紀元二陸軍中尉像（医学部前）等とそれぞれ由緒ある銅像も既に続々と回収されている」（「銅像の横綱も征く　濱尾総長像など続々」『帝國大学新聞』第980号、２面、1944年４月10日）などの記述である。

大学史史料室所蔵の『銅像回収関係』を読むと、具体的な銅像回収に関する経緯が次のとおり記されている。1943年５月３日、文部省総務局長から東京帝国大学総長宛てに、学内における銅像調査の実施が促されている。それを受けて、速やかに銅像調査が実施され、学内に計47件（銅像４件・胸像39件・その他４件）の銅像がある旨、文部省に回答している。さらに６月、文部省から「回収ヨリ除外セラルベキモノ又ハ之ニ準ズルモノ（美術上ノ見地ヨリ除外スベキヤ否ヤ疑義アルモノヲ含ム）ニシテ部局ニ於テ特ニ回収ヨリ除外スルヲ要スルモノト認ムルモノアラバ之ガ詳細ナル事項（作者、由緒、理由等）ヲ記載シタル調書ヲ本月末日マテニ必ス本省ニ提出ス」として、「回収ヨリ除外スベキモノノ認定ハ中央ニ於ケル委員会ニ於テ之ヲ行ヒ其ノ重要ナルモノニ付テハ閣議ノ採定ヲ経ルモノトス」と指示された（「昭和十八年度銅像等ノ非常回収実施ニ関スル件」）。７月、本学では「回収ヨリ除外スベキモノト認メラルル銅像」として、濱尾新銅像・古市公威銅像・工学士市川紀元二中尉銅像・加藤弘之博士胸像を存置するよう返答している。たとえば、加藤胸像については、「加藤博士ハ本学初代総長トシテ教職員及学生ノ欽仰スル本学功労者ニシテ其ノ胸像ヲ存置スルハ学生訓育上果又本学歴史上意義アル紀念物トシテ必要ナリト認メラル尚作者〔朝倉文夫〕傑作中ノ一ニシテ美術上ノ価値亦尠ナカラズ」と存置の希望理由を述べている。また、文部省へ上記の旨返答する以前に、山田三良名誉教授などから濱尾像などに関する意見が内田総長によせられていた。「本学ニ效セル功績等ニ顧ミ之ヲ存置スベキモノト考ヘラルルモ、他方浜尾氏ノ気持ヲ推測スレバ現下ノ時局ニ鑑ミ恐ラクハ欣然トシテ回収ニ応セラルル意思アリト信ゼラル　依テ此ノ際ノ措置トシテハ浜尾氏ノ本学ニ於ケル功績並ビニ銅像ノ存在ガ学生教育上

濱尾新先生像（堀　進二作）
題　　字（高田竹山書）



濱尾新先生銅像建設工事概要

銅　　像：—
高さ約九尺、底面六尺四方、重量約六百貫

臺　　座：—

前面間口	46.9尺
中央部奥行	34.5
壇の高さ（中央部路面より）	9.5
臺座の高さ（壇上より）	4.95
背面中央街立高さ	11.1

構造概要：—
構造主體は總て鐵筋コンクリート造にして基礎の深さは中央部道路面より七尺五寸なり。臺座の設計は約三十八坪半を有する廣き壇を設け前面に階段を置き背後に高き街立を繞らし左右に休憩用腰掛を設け此の中央に臺座を置き銅像を据えたるものなり。階段は前面道路の傾斜に伴ひ左右より昇る緩徐さし壇の高さは道路を距て、前面にある芝生土手の高さより約一尺高く道路面より其の中央部に於て九尺五寸なり。石材は全部福島縣產櫻みかげを用ひ表面小叩き臺座の部分は本磨きさし使用數量は約二千百立方尺なり。

工　　期：—
昭和七年九月起工、昭和八年六月竣工

工事直接關係者：—
銅　　像——堀　進二、作
臺　　座——内田祥三、岸田日出刀、桑田貞一郎、設計及監督
銘　　文——黙都宇之吉、撰　岡田起作、書
題　　字——高田竹山、書
臺座工事——大倉土木株式會社、請負
造園工事——姫田庄二、請負

『濱尾新先生銅像除幕式記念』より

効果アル点ヲ強調シ之ガ回収除外方ヲ具申シ中央ニ於ケル回収委員会ノ認定ニ委ヌルヲ妥当トス、而シテ同委員会ニ於テ万一回収スベキモノト認定セラレタル場合ニ於テハ回収前、浜尾家当主ニ対シ一応ノ諒解ヲ得ルヲ適当ト思料ス」(1943年6月25日)。1944年1月10日、文部省総務局長から総長宛てに、「回収除外方ニ付御申請相成リタル銅像ハ回収スベキモノト決定」したと通知された。2月には、銅像関係者らに対して総長から、「就テハ以上ノ如キ経緯ニテ時局下万不得已ル次第ト存ゼラレ候度何卒右銅像回収ニ関シ御了承相成度」と宛てられている。

しかしながら、実際の銅像回収作業は大学営繕係や各学部で取り扱っているので、学内の元ある場所からの撤去が、そのまますべて金属供出へつながったのかどうかは、やはり疑問も生じる。その一端をうかがう情報として、戦後に刊行された「大学新聞」の記事が挙げられる。「大学内の銅像は相かわらず台ばかり図書館の裏にも御覧のように、浜尾総長と抜刀した日露役の中尉が雨にうたれている、中尉は電気工学科出の市川紀元氏、東大卒最初の戦没者、これらもやがて元の座へもどるだろうが、くず鉄供出をさぼつたのは、大学が歴史を見透したのか、能率の悪い機構のせいかは分らない」(「浜尾総長と市川中尉」『東京大学新聞』第1087・88号、1948年9月9日、1面)、「戦時中金属不足の折に、この銅像もこわすよう文部省から要求されたが、大学側がこういうものは残しておくべきだと何とかことわったという。」(「浜尾新像　1.6トンの好々爺」『東京大学新聞』復刊267号、1963年11月6日、3面)の記述である。現状の筆者には、学内にある銅像回収の真実はいまだ把握できていない。さらなる史料に基づいた追究が、今後の課題である。

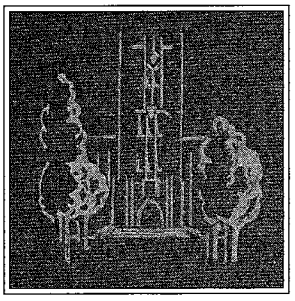
現場の声として、学生を含めた教職員ら学内関係者、そして卒業生や元教職員らOB・OGなどに対して、ひとつ問題提起したい。本学は、来年創立130周年を迎える。創立130周年に向けて、もっかさまざまな企画や行事が予定されていると思われるが、本学全体のこれまでの歩みを象徴するような歴史的な貴重史料群を、後生に末永く、創立150周年、200年と継承できるように、この機会に安全な保存スペース(東京大学アーカイヴズ)や恒常的な財源(大学史資料保存基金)などを学内でなんとか確保して、現在を生きるものとして次世代に責任をもって「東京大学史」を橋渡ししなければならないのではないか。大学の記録として、オリジナル史料の保存につとめるいっぽうで、さらなる学術研究の向上や社会貢献の進展をはかるために、東京大学史教育・大学史研究の普及や貴重史料のデジタル・アーカイヴズ化など(史料の活用)にも方策すべきであろう。たとえば、今回取り上げた『銅像回収関係』などの大学史史料室所蔵史料の多くは、いまだ十分な予算措置が整わないため、そのデータはマイクロフィルムにもCD－ROMにも保存されていない状況である。このような歴史的な貴重史料を保存・活用するために、どのように学友を含め本学全体で具体的に対処していくのか、まずは足元から学友とともに真摯に始める必要があろう。

(たにもとむねお：大学史史料室)

…表紙の写真に関して…

杉仁氏より寄贈。彼の父・杉豊氏が昭和4年、東京帝国大学工学部造兵学科を卒業した際の卒業アルバムの中から3点を掲載。当時の学生の雰囲気をよく偲ばせる写真である。この他にも建物など、昭和初期の学内風景や、学生生活の様子をうかがわせる写真もある。

「四兵会」とは、昭和4年に工学部造兵学科を卒えた卒業生による同窓会である。



史料室日誌抄録（平成18年２月～平成18年９月）

２月21日（火）　大東文化大学荒井ゼミ見学対応。
２月24日（金）　谷本室員、大学史科研費研究会参加（広島大学学士会館にて）。
３月４日（土）　谷本・瀬川室員、個人情報研究会参加。
３月12日（日）～３月14日（火）
　　谷本室員、大学史科研費研究会参加（沖縄県立公文書館にて）。
３月17日（金）　第63回史料保存委員会開催（医学部総合中央館310会議室にて）。
４月５日（水）　学生HP編集部の見学対応。
４月７日（金）　「東京大学史史料室ニュース」第36号刊行、発送。
４月21日（金）　資産課より紛争史料１箱受入。
５月３日（水）　谷本室員、外山正一の辞典解説執筆。
５月24日（水）　谷本・瀬川室員、小早川氏（法学部）より学徒史料受入。
５月27日（土）　谷本・瀬川室員、個人情報研究会参加（お茶の水女子大にて）。
６月13日（火）、６月15日（木）
　　谷本・柏木室員、旧学生部総務史料受入（60箱）。
６月19日（月）　「東京大学史紀要」第24号刊行、発送。
７月８日（土）　瀬川室員、個人情報研究会参加。
８月17日（木）　大学総合教育研究センター大多和氏他３名見学対応。
８月26日（土）～８月27日（日）
　　谷本室員、旧制高等学校セミナー参加（松本にて）。
９月14日（木）～９月17日（日）
　　谷本室員、教育史学会大会参加（大東文化大にて）。
９月23日（土）　谷本室員、大学史科研費報告（東北大にて）。

この間の閲覧者数
　学内者　13名
　学外者　11名

主な学外閲覧者所属機関
　一橋大学大学院、跡見学園女子大、松本大、茨城県庁、九州工業大、京都大学大学文書館、日本薬史学会

文献撮影・複写許可件数　９件
調査（照会）件数　　64件

題字　森　亘元総長

東京大学史史料室ニュース　第37号
発行日：2006年11月30日（年２回発行）
編集・発行：東京大学史史料室
東京都文京区本郷７－３－１
電話：03（5841）2077（直）
印刷所：株式会社 芳文社
東京都町田市木曽町2320
Archives Section of the University of Tokyo